

# 自発、模索、達成感、そして成長

## CVG大阪 常連校の舞台裏



HAL大阪の授業風景。教育方針として創造性の訓練を重視している

10回を迎えたキャンパスベンチャーグランプリ(CVG)大阪を盛り上げてきたのは、やはり学生たちの熱意だ。毎回複数の応募があるレギュラーの顔ぶれのうち2校を取材した。

取り組み、求めに応じて丁寧なアドバイスをスライルだ。テーマ選択は自由、基本は1人でやることとしている。

コスト計算などの部分を指導すれば入賞率は上がるだろうが、それでは一番大切な学生の自発性が育たない。学生も、あえて口をつぐみ、学生同士で発表しあう中で気づきの任せている。

「審査の方々に迷惑さうだが、応募数の制限もしていない」(永峰さん)。

同校は84年、学校法人モリド学園が当時の数少ない4年制のコンピュータ専門校として開校した。IT、ゲーム、CG、ミュージック、ロボットの学科中心に卒業生は約3万6000人を数え、4月にはカーデザイン学科も開設する。高い就職率を誇る専修学校として、最新の設備、第一線で活躍する教師、インターンシップ制度など、レベラアップしたとの評価は、一人当たりの経験量の増加がスキル向上につながる。

### 学校と社会 貴重な接点

「学生それぞれの創造性を開発することがわれわれの教育方針であり、CVG大阪への参加はその一環。アドバイスをアレンの予行演習は同回でもつきあうが、特別な指導や教育主導の修正はしない」と、HAL大阪(谷勝学長・大阪市北区、08年にコンピユータ総合学)の代表者。

度やケーススタディなどあらゆる方法を通じて学生が実践的な能力を身に付けられるように図っている。とりわけ力を注いでいるのが創造性開発教育だ。「創造力を持たなければ、ワーカークラスにいてもクリエイターにならない。単に指示通り動くのではなく自らの創造力を駆使して問題解決の道筋を考え、対処できる姿勢が身に付いた人材こそ即戦力では」(同)。

### 阪大院工学研究科・森研究室 「研究作業と通じる」

CVG大阪で上位入賞者を多く輩出してきた大阪大学。中でも大学院工学研究科の佐々木研究室(現・森研究室)から多くの入賞者を出してきた。

森勇介教授は「CVGでの提案でも、何のためか研究しているのかという点は同じ」と話す。学生にCVGへの応募を勧め、そのほとんどが「せすビジネスプランを作成できる」という。

第3回CVG大阪の優秀賞を受賞し、後に創設を設立した安達宏昭社長も佐々木研出身だ。佐々木研では比較的、企業との共同研究が多く、日々の研究活動で何を解決するための研究なのか、目

的が明確だったこともあって、学生の前段階から力、考え抜く力、チームワークなどを養う事業となっている。

- 歴代の大賞獲得タイトル
- 第1回 英語学習者のための英文添削サービス
  - 第2回 炭素・酸素同時ドーピングによる導電性窒化アルミニウムの作製
  - 第3回 2足歩行ロボット
  - 第4回 エキシマレーザーによる新規バイオ・マイクロチップ作成法の開発
  - 第5回 原料の水溶による高品質CLBO結晶の育成(テクノロジー大賞)、創成型教育サポートシステム「my解決君」の開発(ビジネス大賞)
  - 第6回 高出力全面体紫外レーザーを実現するCBO結晶の開発(テクノロジー大賞)、NFCを利用した名刺交換サービスBizADCARDの提案(ビジネス大賞)
  - 第7回 複合セラミックを用いた凍結血液急速解凍装置の開発(テクノロジー大賞)、スポーツ系フリーペーパー「スタスタ」(ビジネス大賞)
  - 第8回 水素化合物原料を用いる新たなGaN単結晶成長技術の開発(テクノロジー大賞)、著作権に配慮したオリジナルマンガ限定の投稿サイト『Comic Mix』(ビジネス大賞)

情報通信技術の普及が加速した10年だった。携帯電話で見ると、国内の契約数が97年1月時点で約1893万だったのが、00年に5000万、07年に1億を突破した。電気通信事業者協会の統計から。またインターネット利用人口を総務省の調査によると、07年に1億を突破した。

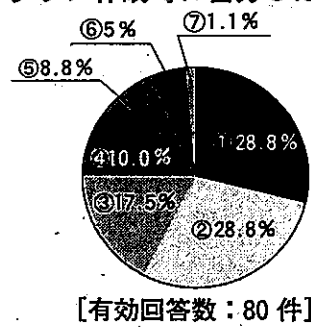
「10年前は、自由化の波が押し寄せ、多くの人が起業活動に参入している。第1回は、自由化の波が押し寄せ、多くの人が起業活動に参入している。第1回は、自由化の波が押し寄せ、多くの人が起業活動に参入している。」

「10年前は、自由化の波が押し寄せ、多くの人が起業活動に参入している。第1回は、自由化の波が押し寄せ、多くの人が起業活動に参入している。」

「10年前は、自由化の波が押し寄せ、多くの人が起業活動に参入している。第1回は、自由化の波が押し寄せ、多くの人が起業活動に参入している。」

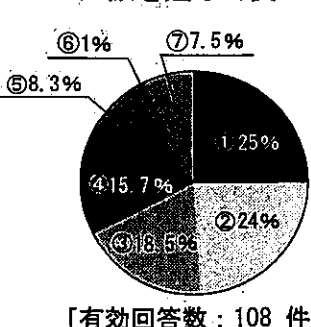
### 受賞プランに見る10年

プラン作成時に苦労した点は？(※複数回答可)



- 事業探査・収支予測の作成
- 市場性・将来予測に関する調査
- 事業計画の作成
- 技術的な問題の改善
- 研究データの採取・集計
- 特に苦労はなかった
- その他

CVG大阪を通じて良かったことは？(※複数回答可)



- プレゼンテーションの勉強になった
- ビジネスプラン作成の勉強になった
- 他校の学生との交流ができた
- 就職活動に役立った
- 起業したいと思うようになった
- 特になかった
- その他

99年の「第1回千里キャンパスベンチャーグランプリ」開催以来、これまでの10年間の応募数は累計2595件、表彰件数は232件に上る。10回を機に事務局では今後の運営に役立てるため、過去の受賞者へのアンケートを実施。CVG大阪で苦労した点、振り返りのメリットなどを聞いた。

### 歴代受賞者にアンケート

アンケートは08年8月に郵便、電子メールで実施。目的はプラン作成や起業時における問題点、さらに受賞プランの現状を把握することで、起業・事業化への支援体制の確立につなげること。対象は第1～9回の受賞者214人から重複受賞者や住所不明者を除いた100人で、そのうち39人から有効回答(複数回答可)を得た。プラン作成時に役立ったこと(アドバイスの情報源)としては、「インターネット」が25人と最も多く、「先生」(17人)、「友人」(14人)、「書籍」(13人)なども続く。そのほか4人がベンチャー支援機関の助言を挙げている。また、作成時の一番の苦労として、約3分の2の23人が「収支予測の作成」「市場・将来調査を挙げる一方で「特に苦労はなかった」とする大物が4人いた。

受賞後の動向については、「何もしていない」「進展なし」とする回答が26人と多いが、3人が起業したほか、他者への技術移転(1人)や後輩に引き継いだ(2人)を含め、現在、10人が起業活動を継続している。

も提案を支える仕組みとして当たり前のように組み込まれている。

力隊員としてカーナでの2年間の活動経験をもとにした提案が、高い評価を得て大賞を獲得した。インターネットの活用により、地元的人的資源活用と所得獲得機会を提供するといった社会性ある内容が第3回開催で現れた。この「2足歩行ロボット」は、自由化の波が押し寄せ、多くの人が起業活動に参入している。

### 激変の時代、

### ケータイ、新技術、厳しさ続